
その姫の秘め事

麻由

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その姫の秘め事

【Zコード】

N6812D

【作者名】

麻由

【あらすじ】

みなじいの少女からお姫様に昇格なんて、私ってついてるかも。
そう思つたのもつかの間。待つっていたのは最高にツライ生活だった。

プロローグ（前書き）

時代物ですが言葉はほとんど現代語です。あぐはぐな感じを受ける
かもしれません、どうぞお楽しみください。

プロローグ

「 おお…！」の子が…まさに姫様にうつぶたつだ」

ひげ面の男はとも嬉しそうに私を眺め回した。横の若い男はその部下だらうか。

「 女、この子の家族は？」

「 いいえ…！」の子は拾い子ですので、親兄弟はおりませぬ
「 ならば問題あるまい。連れて行くぞ」

「 そんな、急に…」

「 礼はたつふりさせてもいい。 おこ」

「 はつ」

「 ま、まあ、こんなに…！」

おかみさんはふるしきのなかの金ぴかの小判に、せつと皿の色を変えた。手渡されるとすぐにがっちり抱きしめた。絶対に独り占めするつもりだらう。

「 異存はないな？」

「 ええ、ええ！ こんな小娘でよかつたら、いくらでもお連れになつてくださいな」

おかみさんはそういう言いながらつひとつと小判をなでてこる。私のほうなんか見向きもしない。
別に悲しくなんかないけど。

「 では失礼する。世話になつたな。おこ、この子を連れてゆけ」

「 はつ」

第1話・城への招待状

私の売り渡しの交渉はほんのわずかで終わつた。

みなしげの命なんて、その程度のもんなのだ。

こき使えるだけこき使われ、その後どつかに売り飛ばされるのが孤児の運命つてやつ。

けど私は、ここに来た時からずっとこの日を待つていた。

キツーい肉体労働と大嫌いなおかみさんから解放される日を。

ここでの生活ときたら本当に散々だつた。

朝から晩までこき使われ、茶碗一杯もないご飯に、薄っぺらのボロ布団。

水一滴さえもらえない日もあつた。

この家から出て行けるならどこでもいい。たとえおかみさんの次に嫌いな侍のもとへだつて。

ここよりはマシに違ひないから。

「わはははーよくやつたなお前だけ、これでわしらへの褒美は確実だ」

ひげ面は足取り軽く先頭を歩き、私は下つ端の侍に取り囲まれるようにして外に出た。

横にはわつきの若い男がいる。たゞ年は変わらない感じがする。だからって親近感が湧いたりはしない。こいつも侍なんだから。表には城の旗を背負つた馬が停められていて、その周りにはざわざわと巨大な人ばかりができていた。

私が出て来るとどよめきがいつそう大きくなつた。

「なんであるな娘が?」 そう囁くのが聞こえた。にらみ付けると女たちは目を逸らして何くわぬ顔をした。

男は荷物を取つてこさせようとしたけど、私はいいと言つた。

荷物になるようなものなんて持つてないから。

おかみさんは自分の着物やかんざしを買つてお金を使いまくるので、私たちにお金がまわつてくることはなかつたのだ。

この着物だつて何年も着続けてるからすっかり小さくなつてしまつてゐる。

下つ端は哀れむような顔で私を見たけど、男は

「どうか

とだけ言つた。

「その子はどうする？わしの馬に乗せるか

ひげ面上機嫌な声が飛んできた。

げつ、こんなオヤジと乗馬なんてまつひ。

「いやつ！」

私が叫ぶと、ひげ面の顔がピキッと固まり、場の空気が凍り付いた。下つ端たちは寒くもないのにカタカタ震えている。

若い男だけが落ち着いていた。

「突然のことで気が動転しているのでしょうか。馬が走りにくくなりますから、俺が乗せて行きます」

「おお…ゴホン。まあ、そうだな。そうしよう」

ひげ面は機嫌を取り直して、自分の馬にぴょんと飛び乗つた。いきなり小太りが自分の上に落つてちつてきたので、馬はグヒッと苦しそうな声を出した。

「お前はこつちだ」

内心スカッとしているところを男に引つ張つていかれ、私はやや乱暴に馬に乘つけられた。

「あいたつ！」

鞍は信じられないほど丈夫だった。ジーンと痛むおしゃりに手をやる暇もなく、はあつーといつ掛け声とともに馬は走り出した。

たくさんの馬が走る音が、「ドドド…」と地響きのよつと聞こえた。

「あまり世話を焼かせるな」

「うしろにいる男が小声で言つた。

「今のお前は売られた身だ。立場をわきまえろ」

「侍相手に立場もくそもないわ」

私は必死に鞍にしがみつきながら言つた。そうじやなことお尻が毬みたいにポンポン跳ねてしまう。

「嫌いなのか？侍が」

私はふんと鼻を鳴らした。

「大つ嫌い」

男は嫌いと言われても気にしていないみたいだつた。

「残念だつたな。お前は今日から侍がわんさかいる所で暮らすんだ」

「わかつてゐる」

私はうめいた。

「で？私の仕事は何？汗くつさこ服の洗濯？血まみれの刀ふき？」

「仕事はない」

「…は？」

「そうだな…あえて言つなら、暮らすことが仕事だな」

「どういうこと？」

「行けば分かる」

それ以上は教えてくれそうになかった。

まあいいや。どんな仕事だらうと、今までの暮らしのことを思えばつらいことなんてない。

今一番つらこのは、この揺ゆぶりに耐えねることだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6812d/>

その姫の秘め事

2010年12月18日14時18分発行